

第36回 日本動物児童文学賞の受賞者及び入賞作品

第36回日本動物児童文学賞には、107作品の応募があり、児童文学関係学識経験者による第一次審査を経て、動物福祉・愛護関係学識経験者や関係省庁関係者等からなる第二次審査委員会を7月18日に開催し、下記のとおり入賞作品として、大賞1作品、優秀賞2作品、奨励賞5作品が選定された。なお、受賞作品の表彰が令和6年9月23日開催の動物愛護週間中央行事の屋内行事にて行われた。

入 賞 作 品

【日本動物児童文学奨励賞】

【日本動物児童文学大賞】

「亀吉の瞳」

宮古一加（岩手県）

〈受賞理由〉 子犬を飼ってもらうために勉強や家事を頑張っていた主人公・綾香が、理想とする子犬とはサイズも名前も正反対の亀吉を可愛がることができず、お世話もおざなりになってしまう様子に共感できる人は多いのではないだろうか。

亀吉が体調を崩し動物病院で診察を受ける場面では、排せつの観察で亀吉の体調を確認することや誤食をしていないか注意することなど、飼い主の重要な役割や義務について知るきっかけとなり得る。

また、亀吉を通じて成長していく綾香の姿と、だんだん深まっていく綾香と亀吉の絆が物語を豊かにしており、読者に温かな感情を抱かせる作品となっている。

【日本動物児童文学優秀賞】

「キトンブルーの価値」

蜂賀三月（岐阜県）

〈受賞理由〉 「将来就きたい職業」ランキングでトップに選ばれている動画クリエイターを題材にしており、動画配信サービスが身近なものとなっている子どもたちにとって取りつきやすい作品だと思われる。

ペットは個性や意志を持つ存在であり、その個々のニーズや感情に寄り添い、責任と愛情をもって接することの大切さに改めて気づくことができる作品となっている。

さらに、スマホやネットを使いこなせるからこそ、さまざまな情報に触れる機会の多い子どもたちへ、ネットの情報は切り取られたものが多く、全てが真実ではないというネットリテラシーについて説く内容にもなっている。

「クコちゃんと花言葉」 こんどうなつき（北海道）

〈受賞理由〉 犬のクコちゃんのユーモラスな口調と主人公・よもぎとのやり取りが作品の大きな魅力となっている。

獣医師のまるおじさんとの会話では、犬を飼うために必要な知識や飼い主の義務について触れており、ペットを飼ったことのない人にも飼育について理解を深めるきっかけとなることだろう。

よもぎがクコちゃんと、前の飼い主との思い出をたどる展開の中で、真相にたどり着くワクワク感に引き込まれると共に、自分がペットを飼えなくなった時のことや終生飼養について読者に考えさせる要素があり、飼い主としての責任をテーマにした深い内容となっている。

「通学路のフウタ」

伊東葎花（茨城県）

〈受賞理由〉 主人公の光里は、いつも通学路で見かける動かない犬・フウタに興味を持つ。

飼い主のおばあさんが亡くなり、孫の雪乃が世話を引き継ぐが、忙しくなり新しい飼い主を探すことになる。光里はフウタを引き取ろうとするが親に反対され、悲しさと悔しさで泣きじゃくる。そんな光里を見た雪乃は一大決心をする。

飼い主を失ったフウタを思いやる光里や雪乃と、その気持ちにこたえるように元気を取り戻していくフウタの様子が描かれており、読者の心を動かす要素となっている。

また、高齢者がペットを飼う有用性や問題点についても考察され、人とペットの共生について読者に考えさせるきっかけとなる。

さらに、飼い主がいなくなったペットの行く末について、必ずしも幸せな結末ではない事例もあることがリアルに描写され、フウタを幸せにしようと努力する主人公たちとの対比が読者の心に響く作品となっている。

「いつか、羽ばたく日まで」

佐鳥 理（東京都）

〈受賞理由〉 塾に通い始めたことを隠していた友人・結衣に腹を立てていた主人公・小春は、公園でカルガモに餌やりをする人を注意する老人・伊波と知り合い、カルガモについて学ぶ。

翌日、小春と結衣はカラスからカルガモの卵を守ろうとするが、伊波に「放っておけ」と言われる。

伊波から自然界の生き物と人間の関わり方を学び、心の距離を縮めた二人は『カルガモ通信』を作り、公園での餌やりがなぜいけないのか知ってもらおうと行動する。

人と野生動物の共生について、愛護のためと行って行っていることが必ずしも正解ではなく、生態系に影響を与えることのない適度な距離を保つことが重要であることを、会話の中に散りばめて、堅苦しくならないように表現する工夫が凝らされていた。

また、自分の知らないことについて調べ、考え、伝えるという行動力の重要性とその影響力について気づかされる作品となっている。

「翼よ飛べ！どこまでも高く」

こばやしきよ（群馬県）

〈受賞理由〉 六年生のハルキは「ひみつキッズ」を結成し、友人と動画を投稿していた。転入生のうまたんが加わり、ハルキは秘密基地から遠ざかってしまう。

夏休み、山鳩の営巣を撮影し SNS に投稿するが、山鳩が嫌われていることを知り落ちこむ。鳥好きのチハヤと山鳩を見守りながら、成長し変わっていく環境を理解し、自分も目標とする未来へ進むことを決意する。

ハルキが、人々が山鳩を「害獣」であるとして嫌う理由が理解できず、自分はおかしいのではないかと孤独を感じる場面では、秘密基地での「ひみつキッズ」の楽しい記憶との対比が強調されており、深く心に残る。

鳥獣保護管理法や山鳩の生態について、物語にうまく溶け込んでいるため、無理なくそれらをも学べる作品となっている。

「ヤドカリのいた夏」

加藤りょうこ（東京都）

〈受賞理由〉 主人公・純は、クラスメートの健人から押しつけられてしまったヤドカリ 5 匹を、ヤドカリーズと名付けて飼い始めるが、世話が難しく、数が減ってしまい、命を預かることの難しさを実感する。

このままヤドカリーズを狭い水槽の中に閉じ込めたくないと思いつき、海に還す決心をする純と、そんな純を見て健人も自分の無責任な行動を反省する。

純は家族皆でヤドカリーズとお別れをし、ひと夏の思い出が過ぎていく。

押しつけられたとはいえ、飼い主として責任を持って飼育方法を調べる姿は、全ての飼育動物と向き合う基本的な姿であるが、飼い主が皆、それぞれの動物種が飼育に適しているか、適切な環境で飼育されているかを考えているわけではないという現実についても気づかされる内容になっている。

ヤドカリに嫉妬したり落ちこむ健人を心配する飼い犬ペロと、仲間が減っても様子の変わらないヤドカリと大きな違いがあるものの、命の大切さには変わりがないことを教えてくれる作品となっている。

「ごんたものがたり」

三輪円香（千葉県）

〈受賞理由〉 さよの家族は柴犬のごんたを飼い始めるが、お父さんが病気で倒れ、ごんたを乱暴に扱うようになる。そのためごんたは脱走してしまうが、自分を一生懸命探しに来てくれたさよの心を理解し、大人しくなる。脱走後のごんたは介護犬としてお父さんを支え、家族に幸せをもたらした。

お父さんが亡くなり、ごんたも後を追うように亡くなるが、お母さんは天国で再会するとさよに教える。

「生まれてきただけでかわいい」という考えは、命の尊さとそれを大切にする想いが強調され、物語の重要な要素となっている。

また、動物を飼育するうえで起こり得る問題や、ペットが人を支える存在であることについても描かれており、飼い主としての責任と、飼い方だけでなく接し方を心得ておくことも重要であると学べる作品である。

なお、入賞作品のうち大賞、優秀賞作品を収載した「第 36 回日本動物児童文学賞受賞作品集」をご希望の方（1 人 1 冊に限る）に頒布いたします。希望される場合には、住所、氏名、電話番号、上記作品集希望の旨を明記の上、切手 320 円分（送料）を同封し、下記までご連絡ください。

【連絡先】

〒107-0062

東京都港区青山 1-1-1 新青山ビル西館 23 階

公益社団法人 日本獣医師会 事務局

「第 36 回 日本動物児童文学賞受賞作品集」担当

お問い合わせ：

TEL 03-3475-1601 FAX 03-3475-1604

E-mail : bungaku@nichiju.or.jp